# 第十四章　聖者の勇奮

## 祈禱

天の父よ、我儕人生の戦ひをなせばなすだけ人間の力の如何に乏しくして、到底自力にては何をもなし能はざる事を感ずる者でございます、又我等銘々の中に主が植付け給ひし理想は日に月に高くなりますれども、之を實現するに際しては、又銘々の力の如何にも乏しき事を感ずる者でございます、どうか主よ、今日我國に於ては御召を蒙りたる我儕信者を、イエス、キリストの聖名の爲に捕虜となし給ふて、此聖名の爲に己れを忘れ、名譽を忘れ、財産を忘れ、總てのものを忘れて、熱誠忠實に盡すところの者を、我儕の間より起し給はん事を冀ひ奉る、由來我國民は忠義心に富める者なりとの評判を得たる者でございますれば、どうか各自の忠義心が今一層高きところに注がれまして、聖名の爲に奮つて立つの忠義心となり、聖名の爲には何物をも犧牲にして盡すべき、勇奮堅固なる信者を多く起させ給はん事を冀ひ奉る、オヽ主よ、今日の我國民の中には不知不識歐羅巴に流行するところの虚説に捕はれて、己が本分を怠る者あり、在來の忠義心を失ふ者あり、家庭の楽園を招くが如き事をも見受くる次第でございますれば、此時に方り、落着かざる我國民が、イエス、キリストの据ゑ給ひし千代八千代變らざるところの道義の根柢の上に立ちまして、晏如たる事を得させ給ふやう只管に冀ひ奉る、オヽ主よ、今日の我國民が今の如く落着なき有様にて、種々様々なる虚説に迷ふて過ぎ行きまするならば、我國の前途實に如何に成行くべきか、憂慮に堪へざるものがあると存じます、どうぞ御召を蒙りたる我儕基督信徒の中には磐石の上に立つて、同情ある堅固なる者を出させ給はん事を冀ひ奉る、斯くして我々の堅實なる感化が家庭の周圍に及び、社會の全面に及んで、此國を滅亡に至らしめずして救ふ事を得させ給ふやう只管に冀ひ奉る、我國の外交上に關する困難なる問題も、之を解決するのには、國民の自信力と健全なる輿論との必要ありと存じますれども、此方面に關しましても、誠に薄弱なる狀態を現はし居る事と思はれますれば、我儕銘々が今一層信念を磨き精神を養ひ、確乎不拔のものを得て立つやうに、上よりの御力を添へさせ給はん事を冀ひ奉る、どうぞ基督信者の中に終局の勝利は、我儕の主張にある事を自覚なさしめ給ふて、彼方此方の虚説に惑はさるゝものなきやうに、上よりの御祝福を加へ給はん事をキリストに由て冀ひ奉る、　アーメン。

パウロ答ふるは爾曹なんぞ哭て我心を摧くや我主イエスの名の爲には第に縛るゝ耳ならずエルサレムに死るも亦甘ずる所なり、かれ勸を納さりければ我儕主の旨の如く成と曰て止　（使徒行傳第十三章十三―四節）

パウロは彼のマケドニヤのピリピから引返して來たが、其折にも信者達は別を惜んで、一夜語り明したと云ふ事がある、それから前の聖日にお話致した如く、小亞細亞のミレトスでエペソの長老達を招いて告別の勸を致した時に、愈々別となつた場合に多くの人に泣かれたのである、遂に船はツロに着いてツロの信者達と出會致した時に、信者達が聖靈に感じて、

エルサレムにはお上りにならない方が宜からうと云つて制止たと書いてある、それから今度はカイザリヤに參つて、ピリポと云ふ傳道者の家に數日逗留をして居つたときに、猶太からアガボスと云ふ預言者が、パウロがエルサレムを指して上りつゝあると云ふ事を聞いて、態々カイザリヤまで下り來り古の預言者エレミヤの古事を思ひ出したものであるか、パウロの帶を取つて、其帶で自分の手足を縛つて、若しエルサレムに行かれたならば、此通りに皆がパウロを縛るから、上洛を思ひ止まつた方が宜からうと申した、其所に集つて居つた多くの信者達は預言者アガボスがさう云つて制止るものであるから皆それに贊同して、今度はエルサレム行きは中止された方が宜からうと云つて、泣いて制止たのである、使徒行傳二十章のエペソの長老達に對するパウロの告別の演說の中にも、聖靈邑毎に我に示していふ縲絏と患難我を待てりと申して居らるゝ、パウロは今度はエルサレムで酷い目に遭ふと云ふ事は覺悟して居られたが到るところで情に脆い信者達が制止た、啻に情に脆いと云ふばかりぢやアない、肝腎な塲合に於てパウロに何か變があつては困ると云ふ考から、エルサレム行きはお止しなさいと云つて制止たのである、パウロは元來非常な意氣の人であつて、何者にも恐れない、我を遮る者があるならば、突貫して進まうと云ふくらゐな人であつた、けれども一面より見





ればパウロは情の人であつた、哥林多前書の中にも『我愈々爾曹を愛すれば愈々爾曹に愛せられずされど爾曹の爲に財を費し身を盡すべし』と云ふやうな言葉があるのを見ても、總ての信者の父を以て任じて居らるゝところを見ても、溫情の人であつた事が分る、羅馬書僅か十六章よりない小さな本であるが、其小さな本の中にアゝとかオゝとか云ふやうな感じを現はした言葉が五百ケ所あると云ふ、情の人に非ずしてどうしてさう云ふ間投詞が現はるゝであらうか、羅馬書は韓退之の文章のやうに一字も減す事も出來ず、又加へる事も出來ない、又論理のつんだ書物である、議論を好む人は宜しく羅馬書を讀むべしと云つて宜いくらゐに論理のつんだ書物である、其書物の中でさへもこんな感情が溢れてアゝとかオゝとか云ふ間投詞となつて、五百ケ所も現はれて居ると云ふ事である、如何に熱情の人であつたかゞ分る、其パウロは今度のエルサレム行きは身を保たうとは思はず、何か使命を感じて居られる其使命と云ふのは、スリヤのアンテオケでも、ギリシヤのコリントでも、小亞細亞のエペソでも、多くの人々が神の敎を信じたからして、どうしてもエルサレムでは一つ異邦の町々以上にイエスの御證明を立てなければならない、是ちやア濟まぬと思つて、エルサレム行きを企てられたのであらうと思ふ、それにどうも到るところで信者が泣く、聖靈に感じたと云つて制と

止る、預言者までが手を縛つたり足を縛つたりして、サアエルサレムに行く時は此通りだと云つて制止る、如何に決心の強い意氣の盛んなるパウロと雖も、そう涙を以て制止られては、心が挫ける譯である、遂にパウロは大いに心を勵まして、己れを制止て呉れた預言者アガボスの面前で、又己れを愛して呉れたカイザリヤの信者の前で、爾曹なんぞ哭て我心を摧くやと云ふ言葉を述べられた、猶太人には猶太人となり希臘人には希臘人となると云ふパウロである。なし得べき事は總ての人々と睦び親しみたいと云ふ、其パウロが己れを戒め己れを制止る者に向つて、爾曹何ぞ哭きて我心を摧くやと大喝をやつたのは何であらうか、決して預言者を叱つたのでもなく、又信者を責めたのでもない、斯く泣かれては自分が堪らない、自分の心が挫かるゝやうに思ふからして、何故そんなに哭いて我心を摧くのだと云つて、實は我と我心を勵ました、而して何を申して居るか、我は主イエスの聖名の爲には第に縛らるゝ耳ならずエルサレムにて死ぬるも我甘んずるころなりと、實に溫き涙に咽んで人も泣けば、我も涙堰あへないと云ふ場合に於いて、斯くの如き大決心を云ひ現はされたのである、主イエスの聖名の爲には縛らるゝくらゐの事は何だ、自分はエルサレムで死ぬるも甘んじて居る、是はアルプス山が屹然として雲表の上に其千秋の雪を冠つた雄姿を突出したやうなものであ





る、如何なる嵐が來ても風雪に出遭つてもビクともしない、パウロの大決心を示されたところであらうと思ふ。

諸君！パウロは實に意氣の強い人であつた、エペソでは己が幕僚が掴へられて劇場に投込まるゝのを見ると、俺も行かうと云つて其劇場へ飛込まうとして、遂に制止られてよう行かなかつた、又パウロは此後エルサレムで縛られて、多くの猶太人が叫ぶ其中に立つて、階の上から演説を試むると云ふやうな事で、如何にも意氣の強い人であつた、此パウロの意氣は何から出て來たかを學びたい、勇氣と云ふのには性來の勇者もある、性來の勇者と云ふのは時に蠻勇を揮ふ事があるが、イザと云ふ場合には案外弱いものである、性來は臆病であり、又其人の性質は婦女子のやうで、一見柔弱に見える人が、イザと云ふ場合には、山が崩れ掛つて來ても白刃を前に突付けられても、泰然自若として動かないと云ふやうな沈勇の態度を現はす事もある、パウロは性來の勇者であつたか、養うて沈勇を現はされたのか私には一寸分り兼ねるが、彼のステパノが石にて打殺さるゝ場合に、性來の勇者で蠻勇を揮ふ人であつたらば必らずや猶太人の後に從いて石の一つや二つは投付けたであらうと思ふ、けれどもさうはなさずして、其のステパノの石にて打つ人の衣服を預つて人々が石を投げる狀と、ステパノが

氣沮もせずして傷を負けて鮮血淋漓と流るゝ中に笑を含んで、天を仰いで祈りつゝ死ぬると
ころを見て居つたと云ふやうな邊を考へると、確かに勇氣を養ふた人であつたらうと思はる、
養うて沈勇と云ふ境に達した人である、パウロの勇氣の後方に何者があつたかを思はなくち
やアならぬ、蹟勇と云ふのならば、サア喧嘩と云ふと直きに飛出して行く、サア戰さ、何で
も先頭に立つて飛出すのであるが、沈勇は然らず、其人をして武者振り勇ましく立たしむる
使命がなくては動かぬ、何か其人の背後に立つて押出す力が加はらなければ動かない、パウ
ロをして遂に立たしめたものは何かと云へば信仰である、神の使命を信じ、イエス、キリス
トの現はされたる使命を信ずると云ふ此信仰に他ならなかつた、併しながら諸君！使命と云
うても、其使命が人格的の分子を加味されないならば、只使命と云ふ事を考へたゞけでは、
人間が勇み奮つて事に當る譯には行かない、使徒行傳の記者のルカは、一字一句も苟もしない
人であつて、其點に於いては、實にルカの筆は驚くばかりに精巧を極めたものあでる、此所
にパウロの勇氣の非凡であつたところの力を云ひ現はす爲に、主イエスの名の爲にはとある
其所に氣がお注きなされたかどうか、普通の場合には、キリストの爲には、イエスの爲には
と書くべきところを主イエスの名の爲にはと書いてある、キリストと云ふ時は是は職務上の





名前である、イエスと云ふ時は歴史上の名前である、主イエスの聖名と云ふ時には、パウロ
とイエスとの間に何か一種の人格的の連鎖で繋がれるものがあつて、イエスと云ふ御人格が
パウロの總てを捕虜にしてしまつたと云ふ意味が此所に含まれてある、イエス、キリストを
學ぶ爲には總ての物を損せしかど之を糞土の如く思へりと云つて居らるゝところを見ても、
使徒パウロはイエスと云ふ人格に心を捕はれてしまつて居る、今日の言葉で云ふとイエス、
キリストに捕はれて、何も彼もイエス、キリストに差出して、命までも捧げると云ふ所まで
來たと云ふ譯である、私はハルワルド大學のローイスと云ふ哲學者の著はした「忠義哲學」
と云ふ書物の中に斯う云ふ事を見出した、忠は決して情のみではない、忠義の人には自制力が
ある、忠義の人は奉仕する、其使命が彼を指導する、即ち何をなせと命せらるれば直ぐにやる、
決して感情のみにて從ふのではないと、使徒パウロはイエス、キリストの跡を慕ひ、イエス、
キリストの救の道を奉じ、此救の道でなければ社會萬人を救ふ事は出來ないと云ふ確信に達
した、是で總てを救はう、猶太人を始め希臘人までも救はうと云ふのがパウロの使命であつ
た、其使命に搗てゝ加へて救世主なるイエスと云ふ方に心を捕はれてしまつた、此方の爲に
ならば命をも棄つると云ふ覺悟が出來たので、曾に縛らるゝばかりではない、エルサレムに

於いて死ぬるも亦我甘んずるところなりと云ふ、非常なる勇氣を此所に生出して來たものぢやアないかと思ふ、由來我國民は此忠義心に富める者だと云ふのである、其忠義心なるものは何かと尋ねて見ると、譬へば楠正成の如き、どうしても南朝の天子を奉じて我日本を統一しなければならないと云ふ使命を感じたものに違ひない、けれども其使命だけでは、まだ忠義心に驅られて靈す心を生せしむる事は出來なかつた、それは後醍醐天皇が笠置山に正成を召して、親して顏を合せて、敵を征定ぐる事はお前に任せるぞと涙と共にお賴みなされた、其人格的の何物かゝ其使命に加はつて居る、太宰府に流された菅原道實にしても彼の謫所に於いて詠じたと云ふ詩を見てもさうである、垢の付いた御衣を頂戴して、之を捧げ、以て聖天子を思ふと云ふ時には、即ち何と云つて宜いか知らぬが、人格的の或物が加はつて居ると思ふ、忠義と云ふは只君に仕へると云ふのぢやアない、日本の多くの婦人達が良人に對せらるゝのを貞節と申すけれども、實は良人に對する忠義立である、其忠義はどうであるか……女と云ふ者は良人に仕へなければならない使命があるからと云ふ、其道理一偏であれだけの事が出來るであらうか、さうぢやアない、後に至つて良人が放蕩する、自分を置去りにすると云ふやうな場合もあらう、けれども結婚した當時或は五六年、或は七八年の間其良人が如





何に我に對して優しかつたか、其良人が如何に我に對して愛して吳れたか、遠方にある時に、如何に細々と情の籠つた手紙を送つて吳れたか、旅行から歸つて來る時には最も自分が好む物で、得んとして得なかつた物を土産にして下さつたかと云ふやうな、人格的の其所に或者が加はつて來て、後には不屈至極の良人と他からは思ふほどの酷い事をやる、其良人の酷い事をも心に懸けずして、陰になり陽になりして、其良人を良き者になさばやと思ふて忠義を盡す、其忠義は即ち良人に捕はれて居る、良人に捕はれたと云ふのが一番私は適切な言葉だと思ふ、良人に捕はれて眼が見えなくなつてしまふ、忠義と云ふものは斯くの如くにして捕はれる、女が良人に對する忠義立は盲目になり易いものである、家來が君に對する忠義も時には盲目に陷る、是は忠義と云ふもの丶弊かも知れない、人と人との結付きであるから、さう云ふ弊は免れない、其弊があるからと云つて忠義が惡い事はない、其弊を除けば宜い、使徒パウロが主イエスに對した時の心は、信仰と云ふ點よりも最う一歩上に進んで居る、感情と云ふやうなものよりズツと高い所に進んで居る、イエス、キリストに捕はれて總てのものをイエス、キリストに捧ぐると云ふは、忠義の極點に達して居る、主イエスの爲にならば死をも甘んずると云ふところに來た、是はパウロばかりぢやアない、千八百年の基督教會の

歴史は、斯う云ふ主に對する忠義心の深い者が幾千人あつたか、幾萬人あつたか算へ切れない程澤山あつたからして、基督教は世界の表に擴がつて、今日の如き感化を及ぼす事が出來たのである、大正二年度にある我々日本の基督信者の中にも、これくらゐな信者が出來なければならぬ、主イエスに捕はれたと云ふ意味の信者、熱誠なる忠義立をする……忠義立ぢやアない、もう捕はれて（忠義を仕様の、勇を以て立たうのと云ふやうな考なしに）捕はれてしまつたらば、無意識の間に主イエスの爲にならば、己が財産をも己が生命をも捧ぐると云ふ事が出來るやうになる、それをパウロが云ひ現はされた、そこでアガボスもパウロの友の信者達も夫ぢやア已むを得ぬと思つた。

マダ一つ此所にパウロの心を動かして居る者がある、それは何か……今度エルサレムに登れば最期だと思つて居る、最期と云ふ意味は、嘸て主イエスの最期を聯想して居る、主イエスの最期を聯想すると、主イエスのゲッセマネの園の祈禱を聯想して、それでミレトスに於てエペソの長老達にお別れする時も、猶太人の祈禱は毎も立つてするのであるが彼所にはパウロは跪いて祈つたと書いてある、カイザリヤに於いて別れる時も跪いて祈つたと云ふ、立つて祈禱をする猶太人が此場合跪いて祈つたと云ふのは、ゲッセマネの園に於いて主イエスが跪いてお禱りなされた事を思ふて、之を眞似すると云ふのではなく、自然に膝を曲げて祈つたものと思はたる、尙それと共に神の聖旨と云ふ事がパウロの心をシッカリ掴へて、其所に居るところの預言者も信者達も、神の聖旨と云ふ事に掴へられた、聖旨の如くなれと云つて、もう此上は制止ないと云ふので、勇しくパウロのエルサレム行を見送る事になつたと云ふのである、して見ると諸君！勇奮と云ふ其偉い力は二つの要素がある、一つは使命を感ずる、今一つは人格的の要素、即ち君ならば君の情、良人ならば良人の情、主イエス、キリストと云ふ事になつて來ると、パウロは自分はイエスの道に反對した者である、基督信者を迫害した者である、それにも拘らずダマスコに行く途中、キリストが我を召して救ひの道に入れて下されたばかりぢやアない、異邦人の爲に道を傳へやうと云ふ此使命を、罪人なる我にお授けになつた、其イエス、キリストの人格的の情がパウロの心の中に感ぜられたからであらう、私共も使徒パウロに倣ふて、眞個に己が天職の爲己が使命の爲に、何所までも奮闘して、勇ましい武者振を以て終りまで戰ふ事であるならば、矢張りパウロに倣ふて、イエスキリストと云ふ歴史的の人格を學んで、其イエス、キリストから溢れ出るところの愛の泉、其情に絡れて捕はれると云ふところまで行かなければ、此勇氣は決して生ずるものぢやアな

い、我々の勇氣が一寸した事で失せたり、蹉跌いたり一寸した事で元氣が沮喪するのは、何所に原因があるかと尋ねて見ると、使命を感ずると云ふ其感が鈍いのと、主イエス、キリストの其愛の絆に繋がれる、其絆が未だ充分に我を繋がないと云ふ事に歸着するのであるから して、パウロの勇奮の背後には、斯くの如きものがあつたと云ふ事を諸君と共に學んで、今一層私共は武者振勇ましく、御用の爲に勤めたいものである。





# 第十五章　聖なる精力

## 祈禱

天の父よ、我儕はルカの筆に依りパウロの行爲及び其心事を學ぶことを得まして、誠に有難く感ずる者でございます、キリストの死後パウロが精神上の弟子として、地中海沿岸の都府至る處に主の御道を傳ふる事なかりせば、果して御教は世界の面に斯くまで速かに弘まりしや否や測られざる事でございます、キリストを信ずる我儕もパウロの活ける信仰に就いて學び、又百折撓まざるの精神を以て彼が猛進するところに大いに教へらるゝところありと存じます、我儕一氣呵成の精力は之を有するやう存じますれども、パウロの如く久しきに亘りて愈々撓まず、老いて益々盛んなる其精力に乏しき者でございますれば、どうぞ今日は聖なる精力の因つて來る眞源源を尋ねどうか我儕日本人が其弊所と謂むべき廉々を認めて、大いに改善するところあらしめ給はんことを冀ひ奉る、我儕の間には忍耐力餘りに少なくして往々日暮れ道遠しの感を懷く者もございます、又僅かな事に信仰の鋒先が挫かれて、踏躇逡巡する者もございます、どうぞ主よ、三十幾年に亘りてパウロが屈せず撓まず、倒されても倒れず叩かれども屈せず、遮ぎらるゝとも止まず、遂に後ろを顧みず、前なるものに向つて大いに雷進したる其跡を學びまして我々疲れ易く屈し易き民族の中に立ちまして、疲れを屈せず、愈々愈々恐の如く若やぎまして御榮を現はし得る者とならしめ給はん事を冀ひ奉る、今此所に集へる我儕のみならず、國の四方に於て御召を蒙りたる信者一

同が、大いなる精力を有する者とならしめ給はん事を、冀ひ奉る、尙海を越えて京城に御道を傳へんが爲に參り居りまする兄弟達の一行、及び京城教會の信者諸氏の上に聖靈と御祝福を加へ給ふて、どうか彼地に主の御光輝が大いに現はれ、多くの人々が悔改めて主に歸し奉るに至るやう、上よりの御恩寵を加へ給はん事を、冀ひ奉る、主よ、今朝我儕と共に在して、愈々聖なる精力ある者とならしめ給はん事を、キリストに依つて冀ひ奉る、　アーメン。

パウロ會堂にいり憚らずして神の國の事を論じ且勸て三ヶ月を歷たり、然るに剛愎にして之を信ぜざる人々ありて衆の人の前に其道を詆誹ければパウロ彼等を離れ弟子等をも別させて日々テラノスと云る人の講堂に於て論ぜり、二年のあひだ如此ありしかばユダヤ人もギリシヤ人も凡てアジアに住る者悉く主の道を聞ぬ神はパウロの手によりて希有ふしぎの事を行ひ給へり。（使徒行傳第十九章八十一節）

パウロはスリヤのアンテオケを根據としてスリヤ地方に道を傳へ又コリントを根據として希臘方面に道を傳へた、今度は今は土耳其の領分である小亞細亞のエペソを根據として、亞細亞の西の方面に道を傳へる事になつた、何故にエペソを選んだかと云へば、此所はあの方面では商業の中心であると共に世界の七つの偉大なもの丶中に算へられた「アルテミス」と云ふ女神の宮があつて、實に宗教の中心であつた、其七つの偉大なるもの丶一つと算へられた





「アルテミス」の宮は、間口が三十九間と五尺、奥行が六十九間であつた、此會堂を六つも七つも併せた程のものである、總建坪が二千八百坪、疊敷にすれば五千六百疊敷である、千疊敷の座敷が五つ半あるのであるから、其大きな事が夫に依つて想察せらる今日世界で最も大きな會堂と云はる丶天主教の本山羅馬のサンペテロと匹敵すべき大きな建物であつたさうして美觀を添へたのは五十六尺の柱が百本立つて居つたと云ふ、多分大理石の九間と二尺ある柱が百本立つて居つたのだらうと思ふ、斯う云ふ都府であるからパウロは確乎腰を据ゑて神の道を傳へたいものだと一大決心を固めて、此所に道を傳へた譯である。

其都府に多數の猶太人が商業の爲に住居して居つた、猶太人は「アルテミス」の宮は偶像の宮として排斥するところから、此所に猶太人の集會所として會堂が建てられてあつた、其會堂の大さは今知る事が出來ないが、一方に五千六百疊敷もあるやうな大きな宮がある、其傍らで世界唯一の神を拜する爲に會堂を拵へたのであるからして、偖り遜色のないものを建て丶居つたらうと想像される、パウロは毎もの如く先づ同人種である猶太人に教を傳へなければならないと云ふ考から、三ヶ月の間會堂に參つて、神の國に就て大いに說教を試みたところが一部の人の間に夫を嫌ふ者があつた、色々と攻擊もすれば、排斥もするので是は

駄目だと思ふたから、其所を引揚げてテラノスと云ふ人の講堂に移つたと書いてある、御承知であらうが昔の人は郊外生活を好んだ、陰氣な部屋の中で生活するよりも戸の外へ出て生活をする、希臘も羅馬も非常に氣候の宜いところであるから、さう云ふ事になつた、羅馬人は浴場を設けて其所を放浪の場所としたのである、大阪人が寶塚に、堺の大濱に大浴場を拵へて其所へ出掛けて行くのと、能く似て居る、希臘人は「ジムネジオム」と稱へて運動場を拵へた、エペソには五ヶ所の運動場があつたと云ふ、此運動場では音樂をやる相撲をやる其他色々なる遊戯を試みたのである、其運動場に哲學者、文學者又は詩人と云ふやうな人々が參つて、それ〴〵演說をする者もあり、講演をする者もあり、又は詩歌の朗吟をやる者もあつた、テラノスの講堂と云ふは、即ち其演說或は講演の場所に當てられてあつたものだらうと思ふ、當時のアイオニヤ人は朝十時まで一生懸命に稼業を勵んで、十時から午後の三時までは悠々自適したものである緩り晝飯も食べやうし、又郊外に散策を試みる者もあらうし又は運動場に行く、風呂場に行くと云ふやうな事であつたらう、使徒パウロは矢張りアイオニヤ人の習慣に從ふて朝早く起きて、十時までは天幕製造の業を取つて、忙がしく働かれたものと思はれる、十時が來るとテモテやその他の弟子達を引連れて初めのほどは會堂でやつ





た、三ヶ月後にはテラノスの講堂で敎を說いたと云ふ事である、總ての人が忙しい時にはパウロは家にあつて製造業をなし、人が是から身体を休め頭を休めると云ふ時に、其悠悠自適の時を利用して、神の敎を說かれたのである其傳道は丁度私共が各地に執行ふ擴張傳道、又は集中傳道のやうなものであつた、日曜日に朝と晩に說敎をするとか、或は週間に火曜と木曜と土曜日に聖書の講演をやると云ふやうな手緩い傳道ではなくして、日々テラノスの講堂にて道を說けりと云ふのであるから、毎日〳〵やつたパウロ自身が斯くの如く道を傳へらるゝばかりでなくして、其弟子達を町の四方に送り出して、彼方にも此方にも同じやうな傳道を試みられたものと見える、其結果として猶太人も希臘人も悉く神の言葉を聽いたと書いてある私は之を讀んで、私共は何をして居るのだと非常に打たれたのである、僅か二年と三ヶ月、其短かい年月の間に希臘人も猶太人も悉く道を聽いたと云ふは、驚くべき事だと思ふ、尤も希臘人と猶太人の數が何萬ぐらいであつて、何十萬と云ふ事ではなかつたらうと思ふ、我日本は少なくとも此大阪にキリストの敎が傳はつた以來、正に四十年に垂として居る、尤も大阪にはエペソに比べたならば、十數倍も多くの人間が居るからであらうけれども大阪で戸毎に行つて調査して見たらば、今尙基督敎のきの字も聽いた事のないと云

ふ人が幾十萬あるか知れない、實に恥べきの至りである、尙又パウロの傳道の結果として、魔術使者で多くの利益を占めて居つた者が悔改めた結果として、其魔術に關する書籍を集めて、多勢の前で火に燻べて燒いてしまつた、其價は今の金に換算すと一萬七千圓になる、どうも夫は澤山な書物であつたらうと思ふ、一萬七千圓の價ある書物を燒いてしまつたと云ふので、如何に深く人心の底に神の敎が徹底したかゝ分る、マア是くらゐに一つ猛烈に傳道をするでなければ、どうも根本から國民を造り變へるなどゝ云ふやうな事は出來ない、今でも御互ひが猛烈な非常な勢を以て道を傳へたならば、迫害も起るであらうが、又結果も見るべきものがあるであらうと思ふ。

さて諸君！今日學びたいと思ふ事はパウロの精力である、パウロはどちらかと云へば、身體は餘り丈夫な人ではなかつた、又眼の惡い人で、是が爲には甚く弱つて居られた、手紙を書くにしても自分で筆を執る事が出來ない、必らず書記に書かせて、署名するだけが辛とであつたと云ふ、其上に下ガラテヤに傳道された結果として、マラリヤ熱に罹られて夫が患ひとなつて、時折病床に親しむ身となられた、哥林多後書の十二章に、三度までも此刺を我より取除き給へと祈られたのは、仕事が忙がしいのに病床にのみ臥して、時には眼を患ひ、





時には身體に痛みを覺えて意の如く働けないから、若し治る事ならば神よ、此病氣を我より取除き給へと云ふ、切なる祈禱をされた譯であらう、けれども神は我恩寵爾に足れりと云ふの言葉をお與へになつて、其病氣はお取去りにならなかつた、諸君！一寸考がへると精力と云ふは、身體が丈夫でなくては續きさうにないと云ふの感が起る、夫は私もさう思ふ、身體が丈夫でなければ精力は續かない、けれども其反對に身體の丈夫なる人必らずして精力家ではない、獨活の大木と云ふ事もある、馬鹿に大きな盛んな身體をして居るが、始終居睡り半分で世の中を送つて居ると云ふやうな人間もある、パウロの精力は其源は身體ではなかつた、確かに精神であつた、精神が强ければ身體が少々弱くても、丁度彼の佐野源左衛門尉常世が乘つた馬のやうなもの、痩馬である、痩馬でも常世の如き精神の者が乘つたらば、其馬は矢張り勢力を出す、人間の身體も痩せたりと雖も、或は病氣に冒されたりと雖も、精神家が其身體を使つて行く時には、矢張り其身體も確かに用をなすものであるジョン、アールモットの如き精神の盛んであり、身體も壯んであれば、鬼に鐵の棒を持たすやうなものである、けれどもさう注文通りには行かない、パウロは不幸弱い身體を持つて居つたけれども、其身體を用ゐて今お話する如く、朝の間は天幕製造で一人前の仕事をやつて居る、人が是か

ち休むと云ふ時に出掛けて行つて精神的も精神的も、人の心靈を救ふ事の爲に一生懸命に活動して居る、どうして斯う云ふ精力が得られたであらうか、其精力が七日か十日なれば痩我慢でも續くであらうが、エペソに於てだけでも二年と三ヶ月と云ふ神の召を蒙つてから死に至るまで三十幾年の間、パウロは活動を續けられた、實にパウロの精力は三十幾年連續して見て宜い驚くべき事と云はざるを得ない、丁度之に就て想ひ浮べたのは、歐羅巴の宗教革命の時代に現はれた、革命の事業に取つてはルーテルに遲れたけれども、其動に於てはルーテルを凌ぐと云つても宜い彼のジョンカルビンの事である、カルビンは佛蘭西人であるがスキッツランドのゼネバに腰を据ゑて獅子吼をやつた人である、雷に講壇に立つて叫んだばかりぢアない、其都府の政治の事にも力を加へた、又カルビンが著はした書物と云ふは、彼の『神學叢書』の如きは四百年後の今日、世界の神學者が、どうしても左右に置いて、之を參考しなければならないやうな傑作である、さう云ふものを出して居る、其カルビンはどんな人かと云へば身体は算へて見ると、喘息に、痛風に、結石……何か石が身体に出來た、加ふるに發熱をすると云ふ、五病氣に一つ足らぬ四つの病氣持であつた、何れも困難な病氣である、其弱い体軀を提げて二十八年の間繁激なる仕事に堪へて、當時の世界を驚かすばかり





りの革命の事業を決行した、蓋し精神が旺盛であれば、身体が少々弱くてもやれると云ふ事を證據立るものである、世の中には身体は希臘人も素足で逃げ出すやうな立派なものを持ちながら精神が萎靡して振はない爲に碌々として日を送つて居る者が多い、して見ると精力家にならう、精力家になつて一つ大いなる働きをやつて見まうと云ふ考であれば、精神を養はなくてはならぬ、精神なるかな〳〵、精神あつての人間、精神が眠りかぶつて居れば、如何なる立派な体軀を備へても身体は何の用をもなさない、精神が旺盛でありさへすれば、弱々しい身体を持つても、今お話するが如き世界を驚かす程の偉業が出來るものである。

さてパウロはどうして此精力を得たかと云ふと、一つは確かにパウロの天性であつて、自分がキリストを信ぜざる以前はパリサイ教を信じて居つたから當時の相齊しい者に比べて見ると自分は其中でズッと頭角を現はして居つたと自白して居られる、神の道を世に弘めると云ふ事に就ては、何人にも遲れを取らなかつた、性來の精力家であつたと云ふ事は之に依つても窺はれるけれども性來の精力家必らずしも其精力が續くものぢやアない、何時かバタンと倒る丶事がある、性來の精力に滿てるパウロが更に養ふた、どうして養ふたかと云へば、パウロは非常に宜い主題を掴へた、キリストの御召を蒙つて、神の國を異邦人の間に傳ふべ

き使命を受けた、此神の國に就いては、彼は亞拉比亞の野に引込んで三年の間學んだ、其後エルサレムへ行つてお弟子達に就いて意見を交換し、夫から多年の間或は學び或は實驗した、此神の國、即ちキリストの敎に就いては實に造詣の深かつた人である、其點を思はなくちやアならぬ、先日も私は「職務に熱誠」と云ふ題で話した時、一寸自己の事に就いて申上げた事がある、政治家にならぬかと云ふ誘惑が來た、そこを政治に關する書物を多數買求めて讀んで見た、讀んだら、是は全生涯を通じて一生懸命に學んでやれるやうな仕事ではない常識のある人間であれば、餘り深く學んだり研究したりしなくてもやれる事だ、そんな常識でやれるやうな事であるならば、自分が選ぶべきものではないと思つて、其誘惑に打勝たさうして幸ひに、キリストの御敎を天下に宣傳すると云ふ方面に用ゐられ此敎を天下に傳へると云ふ考になつてから、日曜と土曜を除くの外は毎週五日の間二時間なり三時間なり力を込めて神の國の事、若くば之に關係ある事柄に就いて研究しない日はない、實は宜くない頭を絞つて一生懸命に學んで居るが、召を蒙つて三十幾年を經た今日、もう底を叩いたかと尋ねられたならば、神の國に關する智識に就いては、萬分の一か、二か僅かばかり窺ひ得たゞけであつてニユートンの言葉を藉りて云ふならば、海の水を貝殼で掬ふぐらゐ



なものだ、まだ知らないもの、學ばなければならぬ事、窺はなければならぬ事がどれだけ澤山あるか分らない、そこでいかほど學んでも足りない、いかほど研究しても尙足りない、どうしたら宜からうか、出來るだけの事はやらなくちやアならぬと思つて學んで居るくらゐに、其神の國と云ふ者は奥行のあるものである、思入のあるものである、パウロは夫を摑へたものであるから、深く〳〵養ふた琵琶湖に幾千萬噸の水が湛えられてある如く、パウロの心の中には、神の王國に就いての智識が豐かに湛えられてあつたばかりちやアない、パウロの心の中には活きた信仰が、其智識と共に湛えられた、琵琶湖から流れ來るところの淀川の水が幾千年幾萬年流れても尙盡きないやうに、パウロの中にある神の王國に關する活きた信仰を其智識は、三十年流れても四十年流れても益益溢れ出る一方であつて盡きない、さう云ふものを此所にパウロは貯へて居つた、其貯へが現はれて猶太人に向へば、舊約の思想と舊約に關係するところの書物から來た思想と、パウロの實驗とが滔々として流れて止まない、希臘人に向へば彼が希臘の文明に通じ、又希臘の哲學を窺ふて得たものもあれば、希臘人と接觸する事に依つて得た智識もあらう、夫が滔々として流れて止まない、二年三ケ月の間毎日々々或は會堂に、或はテラノスの講堂で始終勤めて居つても盡きないものをパウロが有つて居つ

た、夫がパウロの精力となつた源であつたらうと思ふ私共が精力が盡きるのは、何所に原因するかと尋ねて見たらば、頭が空虛である、中に深い貯へがないと云ふ事である、直きに盡きてしまふものだからして、夫が爲に煩悶する、夫が爲に心配する、夫が爲に苦痛を感ずる一週間か十日もやつたらば、夫で早氣息奄々と云ふやうな事になる、人間が早く年を老るのも夫が原因である、チャンと中に貯へがあつて、何事でも演習の時の如く平氣でやつて居るならば、そんなに疲れたり何かはしない、積極の方面から云へばどうしても活きた信仰、神の王國に關する智識を貯へると云ふ事がなくてはならぬ、消極的の方面から云へば精力の保存法を考へねばならぬ、どう云ふ事かとお尋ねになるならば、精力を空費しないやうにせねばならぬ、昨年の末であつた、倫敦で商賣人の活力を保つと云ふ問題で、有名なる醫者が集つて研究をした時に、どうも商賣人が早く疲れる、早く年寄る、何に原因するかと尋ねて見ると朝飯をかき込んで、夫から電車や汽車を掴へようと思つて走る、是がもう一番不可い事だ、今一つは運動をし過ぎては精力が減る、是は身体の話であるが私は實にさう思ふ、三杯食ふて置けば、夫で身体の精力が保たれるのに、四杯食つて見られよ、後の一杯は胃の腑に無駄働きをさせる、夫で自分の身体に必要なだけより食はない事にして置くと、



胃袋が丁度宜い働きをする、無駄骨折をしない、仰山食へば仰山出てしまふ、夫は皆胃袋に無駄骨をさせる譯である、飲物にしても、身体に適當なだけ飲んで置けば身体の精力は保てる夫で餘計に飲み過ぎると、飲み過ぎたいけは外へ出てしまふ、何の役にも立たない、之を精神上に應用するとどうなるかと云へば取越苦勞をする、煩悶をする、取返しの着かない事をしたと云つて悔む、何の役にも立てない、若し眠らない工夫をする爲にならば是は一番宜しい、夜寢床に這入つても寢られぬ、寢られない結果は疲れてしまふ、それは信仰のない證據である、全能全智の神を信ずるぢやアないか、至仁至愛なる天の父を信ずるぢやアないか、父なる神に信賴し、而して自分も出來るだけの事を考へてやつた事であるならば、後で夫に就いて悔む必要はない、又全能全智の活きた神を信じますと云つてする事であれば、斯うと決めたらばもう夫で宜しい、夫がどうなるだらうか、斯うなるだらうかと云つて、寢床の中で寢返り打つて苦んで考へて居ると云ふやうな事は、實に愚の至りである、けれども夫はなか〳〵初めからさうは行かない、私は外の事は知らないが、サア一つ演説でもやると云ふ時に題が決る、題を決めるまでどれぐらゐ苦むか知れない、夫から斯う云はうか如彼云はうかと思つて二日も三日も考へる、サア講壇に立つ、人の前に立つた時には眼が眩む、夫から

話をする話が濟むと、あゝ云ふ事は云ふべきぢやアなかつた、彼所はアゝ云ふべきところだつたのに落したなぞと考へる、三日ぐらゐは頭を痛める、今度はガッカリしてしまふ、精力も何にも脱けてしまふ、チャンと考へて題を決める、夫から研究して、是と決めたらば、夫を頭の中に書いて置く、頭に書いたゃけぢやア足らないならば、紙片に書いたら宜い、さうしてイザ是から講壇に登ると云ふ前でも、身体の精力を保つ爲に二十分間ばかり横になつてグッスリ寢る、サア先生演説をやつて下さい、宜しいと云ふので講壇に出掛けて行つて、さうして自分の頭の中に書いてある事を、聖靈の御力に助けられて話をする、此方にも滿々たる精力が精神の上にも身体の上にも貯へられてあるからして、其話は人の心の腑をグッと貫くことゝなる、私共は神の聖前に於いて我なすべき事、神の使命は何であるか、神の命令は何所にあるかと考へて、是が神の使命だ、是が神の命令だ、此命令を實行する上に於いては神よ、我に聖靈を與へ給へ、神よ、我に力を與へ給へ、私はやります、神よ、遺損ひましたら勘忍して下さい、もう私は取返しの着かない遺損ひをしました、けれどもどうか禍を轉じて福となさしめ給へ、友人が感情を害したやうな時には、神よ、どうぞ聖靈を以て彼を和げ給へと祈つて、平氣で務むべきことを務めたらば、何時の間にか感情を害した人は、神の聖靈の御差圖に依つて、成程一時はどうも不快に思つたが、是は私の方が間違ひだつたと、先方から碎けて來るやうな結果になる、人間は精力が盛んになればなるほど、其精力が支配するやうになる、人定つて天に勝つと云ふ言がある、私共が一生懸命になつてやる時には確かに天も同意して助けて下さる、何でもシッカリ決行ねばならぬ。

夫で私共は決して思ひ惑ひをしたり、せぬでも宜い苦勞をしたり、せぬでも宜い心配をしたりする事のないやうに、神の王國を學び、神の聖旨を學び活きた信仰を持ち、イザ神の命令とあれば、盛んなる勢を以て決行外はない、我既に世に勝てりと云つたイエス、キリストは確かに心の中には千年の後萬年の後までも、考へてドン〳〵決行る方であつた、パウロの得たところのものは確かに聖なる精力であつた、どうか諸君が能く使徒行傳の十二章の八節と十節をお讀みになつたらば、パウロの精力が何所に淵源したかと云ふ事がお分りになるであらう、夫ならばナニ牧師、宣教師、傳道師のみぢやアない私等總ての者が大いに精力を得て、神の證明を立てねばならぬ、七十は愚か八十九十までも盛んなる勢ひを以てやらなければならぬが、今のやうな神經衰弱、ヒステリーぢやア駄目だ、感情やなんぞで心が支配さるゝやうぢやア駄目だ、一つ大いに信仰に依つて行かなくちやアならぬ、神を學ぶとこ

ろが足りない、造詣が足りない、淵源が甚だ淺いからしてさう云ふ事になる、そこで一方に於いては益々基督教の深奥なるものを學び、他方に於いては心氣一轉と云ふ方面を能く學んで要らざる事に無駄骨折をせぬやうにして、力を用ふべき事にドッシリ力を用ゐてやると云ふ方針でお立ちになつたならば、諸君の精力は九十歳までも保たれるであらう、どこまでも聖なる精力を養うて斯道の爲に盡されんことを切望する次第である。

動的基督教　終

不許複製

大正三年七月三日印刷
大正三年七月七日發行

〔定價金五拾錢〕

■著者　宮川經輝
■發行者　東京市京橋區築地明石町八番地　エス、エッチ、ウエンライト
■發行所　東京市京橋區築地明石町八番地　日本基督教興文協會
■印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉
■印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷合資會社東京支店
■發行所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　教文館

終